90

特200

398

井覺深述

弘法大師の宗教より觀たる
支那事變の意義

始

特200
398

帝國圖書館藏

目次

一、はしがき
二、國家と佛教
三、日本精神と眞言密教
四、日本國家の理想
五、支那事變と眞言宗
六、禍を轉じて福となす
七、吾等の覺悟

昭和十三年六月 帝國圖書館藏

弘法大師の宗教より觀たる
支那事變の意義

真井覺深述

一、はしがき

六月十五日は弘法大師が千百六十五年の昔、讃岐の屏風浦に御誕生なされた寔に尊いお日でありますが、其降誕會の奉讃講演に出席するようにと云ふことを委員のお方から御申込を受けましたのでお伺ひしましたのであります。顧ると大正五年の降誕會の時に京都專門學校の講堂で「弘法大師の人生觀」と題して降誕會の講演をさせて戴いたことがあります。丁度それから指折り數へて二十三年になります。其の時は私もまだ若い時でありまして、身體も丈夫であり熱もあり、少々のものも覺えて居りましたが、もう早段々老境に向ひますと體力も衰へて來るが、聲量も減つて來る。殊に近來田舍の山寺に引込んで居ると世の中のことがさつぱり分らぬかういふやうなことで折角出席は致したけれども迚も皆樣の御參考になるやうな話は出來まいけれども、假令少々でもどこか御參考になる點がありましたらと思ひまして、これより暫くお耳を汚すことに致します。

私がこれから申上げたいと思ひますことは「弘法大師の宗教より觀たる支那事變の意義」と云ふ問題であります。今度の支那事變と云ふものが、日支兩國の共存共榮を圖り東洋永遠の平和を確立する爲であると云ふことは、誰方がお考へになつても間違ひないことでありますが、扨て其の支那事變はどういふ意義を有つて居るかと云ふことに就ては、軍人のお方は軍事上から重大な意味を認めてござるであらうし、政治家は政治の上から、實業家は實業の上から、教育家は教育の上から皆それ〴〵重大な意義を認めてござることゝ存じますが、私共宗教に携つてをります所のものは、自分の信ずる宗教の上から此の度の支那事變がどういふ意義を有つて居るものであるかと云ふことを考へました時に、宗教の信仰なり教義なりを通じて、所謂宗教報國の勤をして行くと云ふことは現在に處する宗教家に大切な務であるばかりでなく、六月十五日の大師御誕生日に、大師の御精神を窺ひ、吾々それを手本として、假令少々でも其の御足跡を履ませて戴くと云ふ上から大變に必要なことであると存じましたので、長い題でありますが、かういふ

題を出したやうな譯であります。

此のことを申上げるに就きましては、話の順序と致しまして、先づ第一番に佛教と云ふものと國家と云ふものとの關係に就て一言申上げて次に話を進めて行きたいと存じます。

二、國家と佛教

人に依りますと、佛教と云ふものはキリスト教やマホメット教と共に世界の三大宗教でどれもこれも皆世界的の宗教であると簡單に片附けて論ずる人があります。勿論佛教は一面から考へましたならば世界的の宗教には違ひないけれども、唯さう簡單に片附けただけでは佛教の一面は分るけれどもあとの一面が忘れられて居ると云ふことになつて甚だ遺憾に思ふのであります。我が佛教は一面から云へば世界的宗教ではあるが、一面から云へば國家的の宗教であります。これは聖德太子以來今日までの佛教と云ふものと國家と云ふものとの關係が歷史の上にどういふ風に現れて居るかと云ふことを見たなら

ば誰も異論を言ふことも出來ないことぢやと存じます。禪宗の興禪護國と云ふ言葉や、それから日蓮上人の立正安國と云ふ言葉や、淨土門の王法爲本と云ふ言葉や、弘法大師の鎭護國家と云ふ言葉などは、各宗の御祖師方が御自身の宗門をお開き遊ばす砌、此の教に依つて國家の爲に盡して行かうと云ふ御志が色々の言葉となつて現れたものであり又それが實際御働の上に色々事實となつて現れて居るのであるから、唯佛教を世界的の宗教であるといふやうな風に簡單に考へると云ふことは、佛教の一面を知つて他の一面を知らない人の說である。のみならず私共の考から申しますと佛教が一面に國家的の要素を有つて居ればこそ一面に世界的の宗教となることが出來るのであると思ひます。之を喩へて見たならば、佛教は丁度海水のやうなものであると思ひます。海の水が表面水平を保つことが出來るのは、水が方圓の器に隨つて海の底には高い所もあれば低い所もある、圓い形の所もある、三角な形の所もある。其の海の底の形に應じて水が形を變へることが出來ればこそ、其の表面が水平を保つことが出來るのである。若し水が海の底の凹凸に應じて形を變へるだけの要素がなかつたならば、上の一面が水平を保つと云ふことは決して出來ない。これは洵に卑近な喩ではありますけれども我が佛教の世界的の一面と國家的の一面と云ふことを考へます時に最も適切な例であると思ふのです。

佛教が世界各國到る處として可ならざるはなしと云ふやうな完全無缺な宗教であると云ふことが云ひ得られるのは一面國家的宗教として働をすることの出來るだけの尊い要素を有つて居ればこそ、一面世界的の宗教となることが出來るのであります。若し我日本の國へ來て日本の國體とか、日本の人情とか、風俗とか云ふものに應じて行くだけの要素がなかつたならば、いかに世界的〳〵と云つて見た所で日本では弘まらぬと云ふことになる。さうすれば一面世界的の方が保たれぬことになる。だから一面國家的の要素を有つて居るから一面世界的になることが出來るのであります。殊に私共が信じて居ります所の弘法大師の宗教と申しますものは大師が支那の國へお渡りになつて眞言宗第七の祖師惠果和上から眞言宗の法をお授かりになつた時に、惠果和上が弘法大師に對して

「早く鄕國に歸り以て國家に奉り天下に流布して蒼生の福を增せ然れば則ち四海泰く萬人樂まん是れ則ち佛恩を報じ師德に報ひ國のためには忠なり家に於ては孝なり」と仰せられて居ります。大師が最初は二十年間支那の國で留學なさるお積りであつたのに僅に足掛三年でお歸りになつたのは、惠果和上が御遷化なされて最早學ぶべき人がなくなつたと云ふことも一つの理由でありますが、惠果和上の此の御教訓も一つの重大なる理由であると存じます。

此の國家に奉れと云ふお言葉でありますが今日では皇室と云ふ言葉と國家と云ふ言葉が二つ別になつて居ります。併しながら弘法大師時代には國家と云ふ言葉だけで此中に今日の皇室と云ふ言葉と國家と云ふ言葉との二つの意味が籠つて居つたのであります。だから大師の遺文集を拜見致しますと、國家と云ふことを書きます時に一番初めに「奉」と云ふ文字をお書きになり其次に「爲」と云ふ文字をお書きになり、其次に「國家」とお書きになつて居る。これを私共の宗旨では「國家の御爲に」と讀ませることになつて

居るのであります。これは日本の國の成立ちから申しましても國家と云ふ一つの言葉の中に、皇室、國家の意味を籠めてゐると云ふことは非常に深い意味があると私は思ひます。前に申した通り第七番目の御祖師樣が、此の宗敎を國家に奉れ、さうして天下に弘めて國民の幸福を增せと仰せられたことは大師が支那からお歸りになつて、平城天皇に奉つた御請來目錄の中にお書きになつて居るのであります。斯う云ふやうな譯でありますから、大師御一代のお働きと云ふものは皆悉く皇室國家のためで、一體の佛を造るのも國家の御爲、一卷の御經文をお寫しなさるのも國家の御爲であります。後宇多法皇がお書き遊ばされた弘法大師の御傳記を拜見致しますと、弘法大師一代に國家の御爲に壇を建て法を修すること五十一ヶ度であると仰せられてあります。

さうして、佛前に於て國家の御爲に五十一度の大祈禱をなされた其の御精神を今度は日々のお働の上に實現して國家の爲に凡ゆる方面に御活動なされてござることは今更ら私が改めて申し上げるまでもないことであります。斯う云ふ譯でありますから、國家の

重大時局の時に於て弘法大師の御誕生會を迎へたお互と致しましては唯大師の御德が勝れてござつたとか、或は大師が斯う云ふお仕事をなされたとか云ふことだけを知つたのではいけない。大師の御精神が何處にあつたかといふことをよく知り、大師の弘められた宗教が國家と如何樣なる關係をもつて居るかと云ふことをよく知つて、さうして其の宗教の教義、信仰と云ふものを透して國家の爲に誠心を盡して行く、と云ふことが本年の降誕會と致しましては最も必要なことであらうかと思ふのであります。

京都嵯峨の大覺寺を中興なされた後宇多法皇の御遺詔が國寶となつて今に同寺に現存して居りますが、之を拜見致しますと其第三條に

夫以我大日本國者法爾稱號祕教相應法身之土也故我後繼血脉之法資傳天祥之君主可同盛衰可伴興替我法斷廢者皇統共廢吾寺興復者皇業安泰努力々々背吾此意莫悔耳

と仰せられてあります。私ども大師の宗教を信ずる者は此の御遺詔を拜讀して恐懼感激

の至りに堪へません。是非とも此宗教を隆盛にして皇運を扶翼し奉り、以て法皇の御思召に契ふやうに努力せねばならぬと存じます。夫れに就きましては先づ以て眞言宗の教義信仰が日本國に相應して居る意義を能く知つて法皇の御思召のほどを伺ひ奉り、これを各自の根本信念として國家のために盡さねばならぬ次第でありますから、畏れ多いことながら本御遺詔に仰せられてある日本帝國と眞言密教との相應して居る點について私の愚見を申上げて皆樣の御參考に供したいと思ひます。

三、日本精神と眞言密教

眞言宗の教義信仰が日本國に相應して居る點はいろ〳〵ありませうが大體に於て重要なことが五つあると思ひます。

先づ第一番に日本國土の成立した意義が眞言宗に說く所の大日緣起の說に能く相應して居るのであります。この事は南朝の忠臣北畠親房卿が書きました神皇正統記を御覽になれば嵯峨天皇の條下に

此宗を神通乘と云ふ如來果上の法門にして諸教にこえたる極祕密とおもへり就中我國は神代よりの緣起此宗の所說に符合せりこのゆゑにや唐朝に流布せしはしばらくのことにて則ち日本にとゞまりぬ相應の宗なりと云もことわりにや

と述べてあります。それはどういふ所が符合して居るのかと申しますと、日本書紀や古事記の神代の卷を御覽になれば直ぐわかります通り、我日本の國の出來方と云ふものは一番初めに國常立尊と云ふ神樣が現れさせられ、それから次々と神樣が現れさうして國も神樣であり、山も神樣であり川も海も總て此の現象世界にあるものは神の現れた姿である。唯神の德が現れたと云ふのでなしに、もう一つ切詰めて現れた姿そのものが神である。斯う云ふのが日本の國の成立ちの意義であります。之を弘法大師の宗教に引當て考へて見ると大師は此天地萬物は大日如來と云ふ佛の現れた姿であるとお說きなされて居るのであります。吾々のやうな本當の知識眼の開けて居らぬものが見ると山は單純な山に見えるし、川は單純な川に見えるが、此の大師の教の奧深い所の、わかつた者の目から見たならば山其ものが佛の姿であり川其ものが佛の姿である。溪聲卽ち是れ廣長舌、山色豈に淸淨の身にあらずや。靑々とした山の姿其まゝが佛の姿であり谷川の水の音も松吹く風も其まゝ佛の御聲であるから一草一木一如來、一本の草も一つの如來である。

目下我國は長期戰爭のために國民一般に勤儉貯金を奬勵して居りますが、節儉も萬物は神であり佛であると云ふ信仰を本として、神であり佛であるから必要なことには使はなければならぬ。けれども無駄なことにはマッチ一本でも儉約しなければならぬ。卽ち神の德を感謝し佛の德を感謝し物を大切にして無駄使ひをせぬと云ふことが、節儉の根本思想でなければならぬと思ひます。所が世の中には動もすると人に節儉を勸めます者が儉約をしたら得が行くから儉約をせよと云ひます。成程得が行きます、けれども儉約して得が行くと云ふことは、節儉から來る自然の結果である。吾々が節儉するのに初めから損得と云ふことを考へて節儉すると云ふことは間違ひであると私は思ふ。此の損得

と云ふことを目的にして儉約をすると云ふことになると根本が誤つて居るのであるからそれから誤つた思想が二つ出て來る。一つは節儉と吝嗇とを混同して「出しさへせねばよい」斯う云ふ思想になる、損得から儉約するのであるから出したら損が行きます。そこで口と財布は閉づるに利あり、出さなければならぬ所にも出さぬ。若しも我々日本人が、出しさへせねば良いと云ふような思想になつたならば果して國家が立つかどうか、もう一つは、我がものは大切にするが人の物は粗末にする、損得思想から儉約するから人のものは、なんぼ粗末にしても、ちつとも損は行きませぬ。自分が金を出して買うた酒は一合の酒も、ちびりちびり大事さうに飲む。人が出した酒なら一升でも飲む、自分の買うた酒が大切なら他人の買うた酒も大切なのである。下女下男が主人の家の物を粗末にします。なんぼ粗末にしたつて我懐に損がいかんと云ふことになる。會社へ出る人も、これは會社のものだ、自分のものなら一枚の半紙も切つて使ふが、會社の紙なら二枚でも三枚でも反古にして知らぬ顔をして居る者があります。斯る不道徳なことをするのは節儉の根本思想に誤りがあるより來る結果でありますから改善せねばならぬと思ひます。要するに日本の國に於て神が現れたのが天地萬物の姿であると云ふ神縁起の説と眞言宗に於て大日如來の現れた姿が天地萬物であると云ふ大日縁起の説とが洵によく符合して居るのであります。

それからもう一つは日本の國の理想と云ふものは何に依つて現はしてあるかと云ふと太陽である。朝起きて太陽に向つて手を合はす人がどの土地にもあります。太陽は火の塊でないか、それは學問から云ふ理窟、日本の國民は太陽を通して天照大神を拜む信仰を有つて居ます。大體天照大神と云ふ神様は日本書紀を拜見しますと伊弉諾尊、伊弉冊尊の二柱の神が此の國土山川草木悉くお產み遊ばして國が出來たから此國に君となるべき御方を產まなければならぬ。斯う云ふのでお產み遊ばしたのが天照大神であります。其天照大神は非常に尊い神様であるから、日本書紀には「此の子光華明彩、六合の內に照り徹らせり」と書いてあります。其神光輝いて天地間に其の光りが隅々まで行き徹

る程洵に尊いお方であつた。そこで日本の國の神様と云ふのが、何程許りお祀り申してあるか知りませんが、詰り天照大神を中心として八百萬の神が國家を護り國民を守つてござると云ふことが日本の傳統の信仰であります。これを弘法大師の宗教に引き當てゝ考へて見ますと大日如來を中心として三世十方の佛菩薩が我々を救ふ爲に御活動なされてござると云ふことゝ洵によく意味が似て居る。それから又日本の國の神の御精神を二通りに分けて、一方を和魂と稱し一方を荒魂と稱する。和魂は平和の御精神であり、荒魂は武勇の御精神である。此の神の御精神を二通りに分けて我々が窺ふと云ふことは弘法大師の敎へから云へば、佛の心を二つに分けて、一方は攝受門の慈悲卽ち優しい慈悲觀音様、阿彌陀様、お地藏様などは優しい慈悲を代表してござる佛、一方は拆伏門、武勇の德、不動様であるとか太元帥明王であるとか、或は又金剛夜叉明王であるとか云ふ佛は嚴しい慈悲を代表してござる佛、つまり佛の御心と云ふものがさう云ふ風に二通りになつて我々に働きかけて來る。それが丁度日本の神の御心が和魂となつてお働きなさ

れ荒魂となつてお働きなさると云ふことに洵によく似て居ると思ふのであります。

それから又日本の國は忠と云ふことが國の道である。此の日本の國の忠と云ふ道が弘法大師の仰せられた佛の道と云ふものゝ意味と洵によく似て居ると私は思ふのであります。日本の國の忠と云ふものは忠が道の全體である。其中に親孝行もあれば夫婦の道もあり、兄弟の道もあり、敎育も道德も政治も法律も總てこの忠と云ふ大きなものゝ中に籠つて居ると云ふのが日本の忠であります。是は敎育勅語を拜見して見ると良く分る。弘法大師が佛の道と云ふことをお考へになる時に佛の道と云ふものが二通りある。一つは佛になる道である。佛になる道は金持になる道と違ふ。學者になる道と違ふ。一種特別の道ぢや。普通は佛道と云ふことを佛になる道と云ふのでありますが、眞言宗には佛道と云ふことは佛の行ふ道、斯う云ふことである。佛の行ふ道となつて來ると道は決して單純なものでない。學問でも佛の道は行はれ、お金でも佛の道は行はれ、力でも行はれゝば、辯舌でも文章でも如何なるものを以ても佛の道は行はれるものである。斯う言

ふのが弘法大師の教への立て方であります。ですから日本で忠と云ふことを云ひます其の意味と、弘法大師が佛道と云ふことを仰せられた其意味とが洵によく似て居ると私は思ふのです。

斯う云ふやうなことを一々御話申上げて行き居ると、前の方の話がやたらに長くなりますから是は此の位に致して置きますが、斯う云ふやうな點を後宇多法皇が御考へ遊ばして、此の日本の國は弘法大師の宗教の教へに洵に能く相應して居る國であると、仰せられたのであらうかと私は伺ひ奉て居るのであります。殊に大師が非常に忠君愛國の志の厚い御方であつた。此のことは弘法大師が淳和天皇に奉つた上表文を拜見致しますと能く分る。どなたもよく仰しやることでありますが「生々に陛下の法城となり、世々に陛下の法將とならん」大師の忠義は五十年の短い忠義ぢやない。生れ更り死に變り生々世々を通じて陛下の御爲に盡し、國家の爲に盡すと云ふことが弘法大師の御精神である教義其ものが既に日本の國の教へと云ふものと洵によく一致して居る。之を廣めた弘法大師が忠君愛國の思想の非常に強い方である。のみならず御師匠様が之を國家に奉て蒼生の幸ひを増せと仰せられて授けて下さつた教へである。斯う云ふやうな事柄を考へますと大師が此の眞言宗をお弘め遊ばす時に國家と云ふことを非常に深く御考へなされたと云ふことには色々の點から考へて重大な意味をもつて居るものぢやと私は思ふのです。そこで私共大師の流れを汲んで居るものと致しましては、此の大師の御精神を通して支那事變と云ふものを眺めて見たい。さうして自分の力相應に此の事變に對して誠心を盡して見たいと思ふのであります。

四、日本國家の理想

そこでそれを御話申上げるに就きましては、先づもつて此の日本の國の理想と云ふものが一體何であるかと云ふことが私は話の根本であらうかと思ふ。此の日本の國家の理想と云ふものを洵によく現はして居るのが卽ち太陽だと私は思ふ。私は到る所でよく靑年の御方等にも御話するのであります。日本人は朝起きたら太陽を必ず見なければなら

ぬ。拜む拜まぬは其の人の御勝手ぢやが、兎に角太陽に對はなければならぬ。太陽に向つて日本の國家の理想はあれだと云ふことを能く心に觀じ、其の國家の理想に一致するやうに今日一日働いて行かねばならぬと誓ひ、毎朝之を繰り返して日本精神を養成せねばならぬ。斯う云ふことを若い御方に御勸め申すのであります。どうして私がさう云ふ風に考へるかと申しますと、先刻申上げた此の國の君となるべき御方を生まなければならぬと云ふので御生み遊ばした神様が天照大神であります。大日霎貴尊でありまして、詰り天照大神は神代の昔、實際御座つた神様に違ひないが、我が日本國民と致しましては天照大神の御德を太陽によつて窺うて行かうと云ふことが、昔からの日本國民の信仰であります。それぢやから國の一番大切な神様の御德を太陽によつて現はして居る。それから又天皇の御位のことを天津日嗣と申上げて居りますが、天津日嗣はやはり太陽によつて大君の御位の御名前につけてある。國の名前が日本であり國旗も日の丸である。それから又昔から日本の國では女の子のことを姫と云ひ、男の子のことを彦と云ふ。日

の子供であり日の娘である。それは太陽の子ぢや、太陽の娘ぢとや云ふことです。そこで神代のこと等を書いた本を拜見しますと、神様でも男の神様には彦と云ふ文字がついて居ります。それから姫と云ふ御名前のついて居る神様は皆女の神様です。私は香川縣の者でありますが、讃岐の國の一番初めの神は飯寄彦尊と云ふ男の神様、阿波の國の一番初めの神様は大宜都比賣命と云ふ女の神様、それで昔から讃岐男に阿波女と云ふ、これは讃岐の男が美男で、阿波の女が美女だと云ふ意味ではなく、神代の昔、讃岐は男の神様が元祖で阿波は女の神様が元祖だから斯く申すのであらうと思ふ。要するに日本の國は總てのことが太陽によつて一貫して居るのであります。それだから日本の國の理想は何であるか、太陽を見よ、太陽を見たら日本の國の理想は分る。そこで一番大事な神様の神號を初めとして國家の最も大切なものは皆太陽に依りて名前をつけてある。

所が此眞言宗で一番根本の佛を大日如來と申して居ります。摩訶毘盧遮那如來、是は大日經には大日如來と飜譯してあるが、金剛頂經には遍照如來と飜譯してある。遍照は

遍く照す、大日のことであります、日本で一番根本の神様を天照大神と申上げ、眞言宗で一番根本の佛様を大日如來と稱し奉ることは實に能く符合して居ることゝ存じます。

それから又眞言宗で御經の講義を致します時に、大日と云ふことの意味を三通に說き分けて之を大日の三義と申して居ります。一つは光に生滅なし、永久不滅の本體である是は光其ものゝ本體が不生不滅であると云ふことを云ふのでありますが、大日の德が外へ向いて働く時に其の働き方が二た通りになつて居る。卽ち一は暗を除いて明かならしめ、惣ての物を照らす。それからもう一つは能く諸々の務めをなさしむ。總ての仕事をさせる。此光に生滅なきことゝ總てのものを照らすと云ふことゝ、總てのものゝ働きをさせると云ふこと、是が昔から大日の三義と申して居ることであります。今日の普通の方の常識から申ました所で太陽は光りを吾々に與へる。熱を吾々に與へる。太陽の光によつて吾々は物を見分ける。さうして世の中を渡つて行くことが出來る。それから又太陽の熱によつて人間を始めとして總ての物は育つて行くのである。斯う云ふのであるから之を變つた言葉で言つたら、光は物の道理を知る所の智慧の現れであり、熱は物を育て行く所の慈悲の働きである。佛敎は慈悲の敎でありますが、昔から慈悲と云ふ言葉の意義を說明する時に、悲は苦しみを拔くと云ふことであり、慈は樂しみを與へると云ふことであると申して居ります。私が考へて見ると慈悲と云ふことは物を生かして行く力ぢやと思ひます。一方は物を照す力、一方は物を生かす力、是が光と熱との働きである此の日本が理想を現はしたものとして居る所の太陽の光と熱と云ふものを佛敎の說く所に引き當てゝ考へて見ると、一方が慈悲であつて、一方が智慧である。眞言宗で兩界曼荼羅と申して一切の佛を金剛界、胎藏界に分けます。金剛界は智慧の佛であり、胎藏界は慈悲の佛である。是は丁度光と熱との意味に良く一致して居る。又た敎への上から般若、方便と云ふことを眞言宗で申す。般若は智慧であり、方便は慈悲です。斯う云ふ風に考へて見ますと日本の國は太陽を以て國家の理想を現はす所の象徵として居る國である。そこで吾々日本國民としては此の太陽が遍く世界萬國を照す如く、我が日本の國が

世界の中心勢力としての全世界の平和を保ち、全人類の幸福を進めて行く所の心柱となるやうに努力精進せねばならぬ。

此のことに就て私が思ひ出しますのは、天照大神が三種の神器を皇孫瓊々杵尊にお授け遊ばした時に「此の鏡の分明なるを以て天下に照臨し給へ、八坂瓊の曲れるが如く曲妙(たくみなるわざ)を以て天が下を治しめせ、神劍をひきさげてはまつろはぬ者を平らげ給へ」と仰せられてあります。

所が此の天照大神の仰せられた「あめがした」と云ふお言葉は、之を支那の文字に當てると「天下」と書いてある。一體それはどれだけの廣さをもつた土地でありませうかまた神武天皇が、橿原の宮に於て初代の天皇の御位に卽かせられた時の詔を拜見致しますと、これは名高い詔でありますが

「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩うて宇とせんこと亦可からずや。」

と仰せられてある。

六合とは東西南北天地である。八紘とは四方に四隅の八方である。此の神武天皇の仰せられた六合と云ふことは、其の時には六合とは讀まなかつたでありませう。「あめのした」と讀むか、「くにのうち」と讀むか知りませぬが、兎に角六合、それから八紘と云ふお言葉がどれだけの廣さを意味して居つたものであるかと云ふことを考へますと、それは天照大神が天の下と仰せられ、神武天皇が、「六合」「八紘」と仰せられたのは何れも日本の國の中であると、これまでの者は解釋申上げて居つたのであります。勿論天照大神當時、神武天皇の當時は日本の國が外國と云ふものとの關係がなかつたものだから、さういふ風に其の思召を窺ふと云ふことは當然のことでありませう。併しながら今日のお互日本國民としては、此の「あめがした」と仰せられた天照大神のお言葉の奥底、六合、八紘と仰せられた神武天皇のお言葉の奥底にある深い思召を吾々が伺ひ奉る必要があると私は思ふ。

明治天皇に於かせられては此の皇祖皇宗の御詔勅の奥に潛在せる御思召を御闡明なさ

れて、明治元年三月に五箇條の御誓文を宣示し給ひし時の御宸翰に左の通り仰せられてあります。

「遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富岳ノ安キニ置ンコトヲ欲ス」

これを拜讀致しますと明治天皇陛下が日本帝國の理想を御實現なさらんとする遠大の御思召を伺ひ奉ることが出來る。

それであるからして私共日本國民と致しましては、此の神のお言葉や神武天皇や明治天皇のお言葉の中に奥底深く潜んで居る所の御精神を伺ひ奉りて恰も太陽の光が赫々として全世界を照すやうに日本の皇威國光が全世界を照らし以て世界の平和、人類の幸福を保つ所の中心の勢力になるやうに努力して行くことが、今後の國民としては最も大切な覺悟でなければならぬと思ふし、又將來必ずさうなるに間違ひないと私は信じて居るのであります。

五、支那事變と眞言宗

所が其の日本の理想を實現するに就きましては先づ以て順序として一番近い所の支那との共存共榮を圖り東洋永遠の平和を保つと云ふことの必要が出て來る。所が隣の支那の國は我國とは同文同種の國である。人種も同じであり、文字も同じである。宗教の上から申しましても日本の佛教は支那から教へて貰つた。あらゆる方面から考へて見て、誠にどうも親しい仲である。私共の鄕(くに)では、「遠方の親戚より隣の他人」と云ふことを申します。いくら親戚でも十里二十里の遠方にあつてはまさかの時の役に立たぬ。たとひ他人でも向ふ三軒兩隣は世話も出來れば世話にもなれる。所が一の隣である支那の國はどういふ譯か、遠方の國へ賴つて近き日本を目の上の仇とし、頻りに侮日、排日、抗日の行動をするのはどういふ氣かどうも合點が行かぬ。我が日本としてはどうしても支那との共存共榮を圖つて行かなければ東洋永遠の平和は保たれぬから、終始一貫其方針で進んで居る。然るに支那は何の考であるか、日本の意見にそぐうて來ぬ。來ぬばかりでない。ことゝ〳〵に日本へ楯づいて來る。昭和十一年一月二日に宋哲元部下の兵士が我國

旗に對して侮辱を加へてから次々に色々不法の行をやつて、最後にあの上海に於て大山事件が起つた八月九日までの一年八ヶ月の間に排日抗日侮日の行動が五十九件あつた。此の五十九件と云ふものは、其の中のどれ一つでも日本が之を戰爭の理由にすると云ふことになれば立派に戰爭の理由になる重大な事件である。然るに日本はそれを戰爭の理由にせずに、現地解決、事件不擴大の方針の下に隱忍をして來たと云ふことは能く〳〵支那と提携して東洋の平和が保ちたいからこそ、これだけ辛抱して來て居るのである。所がこつちが辛抱すればする程向ふは調子に乘つて附け上がります〳〵不法亂暴がつのつて來る。これ以上日本が耐へて居れば日本の國の爲にもならぬが、支那の國の爲にもならぬ。無論東洋永遠の平和の爲にもならぬと云ふことから、已を得ず日本が正義の劍を拔き膺懲の砲門を開いたのであると云ふことは皆さんが能く御承知の通りであります日本は和魂の平和の思想で、どうぞして支那との間の問題を解決し、手を引き合うて行かうとて百方手を盡したのであるが支那が日本の誠意を誤解して敵對行爲に出て來たから已むを得ず荒魂が發動した。武勇の精神が發動したのであります。

之を我が弘法大師の教の上から申しましたならば、攝取門のやさしい佛の慈悲の思召で行かうとしたが、どうしてもそれがいけぬから已むを得ず不動明王の劍を拔いたのぢやと云ふことになる。さうすると今度の戰爭と云ふものゝ意義を吾々大師の流を汲む者から考へますと日本の國の理想と云ふものが、大日の德を實際世の中に現はして行かうと云ふ眞言宗の教と云ふものと寔に能く一致して居るし、已むを得ずして劍を拔いたと云ふ此の日本の行き方が、神の御思召から云へば荒魂の發動であり佛の御精神から云へば拆伏の慈悲の働きである。さうすれば今度の戰爭は、これが直ちに宗教上の意味を有つて來ることになる。

大體弘法大師の教は、「卽事而眞、當相卽道」と申しまして此の現實世界の相其の儘に宗教上の意義を認めて行かうと云ふのであります。それぢやから弘法大師はすべてのことをなさるのにみんなそれを佛の仕事としてござるのであります。例へば此の京都の東

寺の塔の東に學校をお建てになつた。これは教育事業であります。あの學校が出來た時にお書き遊ばした文書が遺つてをります。本眞物は米澤の上杉神社の寶物になつてをりますが、あれを拜見して見ると、教育と云ふものに對する弘法大師のお考がよく分る。詰り學問を教へて人間の知識を開かして行くと云ふことは佛の道だ、教育が其のまゝ佛の道だ。文殊菩薩と云ふ佛さんがありますが、此の佛は書物を持つてござる、學問をし知識を磨いて行くと云ふことは其の文殊菩薩の御精神を實際に現はして行くことになる昔から三人寄れば文殊の智慧と云ふ。それから又弘法大師が溫泉を教へたり、或は病人を救つてやつたとかといふやうな保健衞生の仕事をなされたのも、それは單なる衞生の仕事としてなされたのではなく佛の仕事としてなさつて居る。今日京都の東寺の北門の東側に濟世病院と云ふ病院が出來てをります。眞言宗であゝ云ふ病院を設立すると云ふことは、單に人の病氣を治して上げたらよいといふやうな普通の病院の意味ではないので、人の病を治して身を丈夫にすると云ふことが佛の仕事である。現に佛の中に藥師如

來と云ふ藥を持つた佛さんがある。それに依つても人の病を治すと云ふことが佛の仕事であると云ふことはよく分る。さうすると衞生の道其のまゝ佛の道である。すべて大師の教は、さういふ風な教の立方になつて居るのです。それでありますから戰爭そのものを見ましても之を單なる戰爭とか事變とか見ない。宗教の教の上から考へて、それが宗教の教の意味にかなつて居るかどうか、若しそれが宗教の教の意味にかなつて居りさへすれば、戰其のものが直に佛の働である。かう云ふことになつて來ると云ふのが弘法大師の教であります。そこが卽事而眞當相卽道だ。普通の佛教では不殺生、ものゝ命を取ると云ふことは慈悲の教に背く、十善戒なり五戒の一番初めが不殺生、そんならば如何なる場合でもものを殺すのは許さぬのであるかと云ふと、眞言宗では膺懲の爲には——膺懲と云ふ文字は使ひませぬ。調伏とか降伏とか云ひますが、詰り膺懲と同じ意味ですかういふ降伏の爲の故には生き物の命を取つても何等差支ない。差支がないばかりでない、却つてそれが爲に非常な功德になる。かう云ふことが私共が毎日讀んでをります理

趣經と云ふお經文の中に說いてあります。

かういふ風に考へて見ますと今度の支那事變と云ふものが不動明王の御精神の現れた活動であると云ふことになる。そこでお互日本國民と致しましては不動明王の御精神を自分の精神として、國家の爲に盡して行かなければならぬ。

拆伏門の佛は不動さんに限つたことはありませぬけれども、一番在家のお方がよく知つてござるのが不動さん、不動さんを拜んで見ると、大磐石と云ふ岩の上にお居でになる。押しても突いても動かぬ。これから後此の事變がどういふ風に發展して行くか分りませぬが、吾々日本國民としては如何なる大事件が起つて來てもびくともしないと云ふ大磐石のやうな精神を持つと云ふことが必要である。それからあの不動明王のお身は青黑い色をしてござる。青黑い色と云ふのは、仕事をした爲に身が汚れて居る色で、あれは下僕（しもべ）の相と云ふ、勞働者の相です。詰り佛が勞働者の相に身を引き下げてさうして世の中の惡魔降伏をして行かう。かういふのが不動さんの御本願であるからあゝ云ふ相を

してござる。右の手に劍、左の手に索、後ろに火が燃えて居る。事變中吾々國民は不動明王を自分の精神修養の目途にして行きさへすれば、此の事變がたとひ三年續かうと五年續かうと決して差支ない。不動明王に對する信仰は必ずしも不動さんの尊像の前に拜むばかりでありませぬから、吾々が此の事變に對して不動明王の御精神を精神として働いて行くと云ふことになれば、お互自らが生きた不動明王となることが出來るのである言葉を換へて言へば、此の儘にして佛の仲間入が出來ると云ふことになる。完全無缺に出來なくても一寸出來たら一寸の佛であり、二寸出來たら二寸の佛である。力相應、身分相應に自分の此の身の上に不動明王の生きたお働を實現することが出來ると云ふことになればこれ程喜ばしいことはない。

六、禍を轉じて福となす

更に又吾々と致しましては今度の此の事變と云ふものが日本の國家に取つて幸せであるか不幸せであるかと云ふ問題を考へなければならぬと思ひます。一應の考から云へば

無論これは國家の爲に不幸せなことです。事變の爲には多くの人の生命を捨てなければならぬ。澤山のお金を費さなければならぬ。全國民が生活の總てに亙つて色々苦痛を嘗めなければならぬ。かう云ふことになるのぢやから、事變が起つたと云ふことは國家の上から考へて見て實に不幸せなことです。隨つて昨年臨時議會の時に天皇陛下から賜つた詔のお言葉にも「朕之ヲ憾トス」と仰せられてある。國民と致しましては此御詔勅を拜讀して恐懼に堪へざる所でありますから、何卒此不幸を幸福に轉換して宸襟を安んじ奉らねばならぬと存じます。もと〳〵此事變はこちらから仕掛けた喧嘩ではない。向ふから賣りかけられた喧嘩で、之を避けると云ふことは出來ないのでありますから、之を不幸せなことであるとのみ考へて仕舞うてはならない。もう一度考へ直さなければならぬ。其の考へ直す所に宗教の意味が出て來る。

弘法大師が、天皇の勅命に依つてお書きになつた十住心論の一番初めの所に「世の中に藥ときまつたものはない、それと同時に毒ときまつたものもない。世の中のものは使ひ方に依つては毒ともなり藥ともなる」と云ふ意味を御述べなされてあります。昔から子供と鋏は使ひやうによる—と云ひますが、子供と鋏に限らぬ。天地萬物皆使ひ方に依つて毒ともなり藥ともなる。成る程さうに違ひない。モルヒネに致しましても亞砒酸に致しましても私共素人が使へば毒になるが、お醫者さんがお使ひになれば、腹痛でも齒痛でも治る。毒が藥となる。世の中のものは毒ときまつた性質のものはない。藥ときまつた性質のものもない。毒ともなれば藥ともなる。眞言宗專門の言葉で言ふと「萬德圓滿」で總ての性能を具へて居るのであるから、其取扱方によつて如何樣にでも轉換することが出來ると云ふのが、弘法大師の教の立て方であります。ぢやから人間の幸せ不幸せと云ふことでも、かう云ふことは幸せなこと、かう云ふことは不幸せなことゝ決めて居りますが、大師樣はそれは間違ひぢやと仰しやる。向ふから來るものにこれは幸せなものときまつたものがどこにある。これは不幸せなことゝきまつたものがどこにあるか幸せにするかせぬかこつちの受取方と取扱方によつてどつちにでもなる。さうすると向

ふから出て來るのは鬼が出て來うと佛さんが出て來うと、氣の向いた者が出て來うと、氣に喰はぬ者が出て來うと、それを幸せにすることが、出來るやうになつたら、世の中に順境逆境と云ふものはないことになる。順逆不二禍福一如、これが大師の敎であります。

私共の國の小豆島に御當地の方でお四國詣りに行かれた方があるかも知れませぬ。大部村と云ふ所があつてそこに觀音寺と云ふお寺がある。其の寺が十四五年前に全燒(まるやけ)になつた。火事がいつたと云ふことは普通から考へると非常な不幸せ、住職は着のみ着のまま逃げて出たと云ふ話、所が其の後住職が色々努力致しまして、寺が立派に出來上つて入佛供養すると云ふに就て、私に來てお勤の導師もし話もして貰ひたい——と云ふ、一昨年參つた私は燒けぬ前の寺を知つて居りますから、今度行つて見ると前よりずつと立派な寺が出來て居る。挨拶が濟むとそこに居る住職や總代の方に「如何にも立派なお寺が出來た、火事がいつてよかつたではありませんか。昔から燒太りと云ふ、本當に此の寺は燒太り、火事が行かなんだら昔のボロ寺、火事がいつて大きくなつてかう云ふ立派な寺が出來た洵に幸せだ」と祝詞を述べますと、住職は「まだ幸せなことが二つ程あります。私は御承知の通り胃腸病患者、年百年中、胃酸と曹達の飲み通し、所が寺に火事が行きましたので、これはいけぬ。先代からある寺を燒いたと云ふことは、わしの不德の致す所、何でも一日も早く寺を立派に建て上げなければ先代樣にも本尊樣にも申譯がないと思ひ、日本中寄附金集める爲に駈け廻つた。駈け廻つたお蔭で胃腸病が綺麗に癒つてお醫者さんの所へ用が無くなつた」「さうかそれは幸せ、もう一つは何ぢや」「其のもう一つがね、寺が燒けて十方の信者を色々賴みに廻つた。其のお蔭で有力な賴りになる信者が一萬人出來ました。一萬人の信者を得ると云ふのはなか〳〵容易なことでないが火事が行つたお蔭でそれが出來た。此の一萬人の信者さへ離さぬやうにして居れば此の寺は洵に幸福なものであります」。「火事が行つたので寺は前より立派になり、住職の身は丈夫になり、一萬人の信者は出來た、燒太りも燒太りも大燒太りでないか」さうする

と火事と云ふことは幸せか不幸せか—と考へた時に、一應の考では不幸せなことである頭から火事は幸せなものだと見るのは間違つた見方、當り前は火災は不幸せなことぢや災と云ふ字が書いてある。そんならとことんどこまでも不幸せなものか、もう一遍考へ直すと、不幸せの中に幸せの種がある—と云ふことになつて來る。所がそこまで氣の附かぬ人は何ぞ氣に喰はぬことが出來るとこれは辛い〳〵と眉の間に皺寄せまして苦しんで居る。其の苦しみをもう一つ嚙みしめて見る。嚙みしめて見たら苦しみの中から幸せの甘味が出て來る。所が其の嚙みしめる術を知らぬ。それで一應、病氣なら病氣と云ふ不幸せの出た時に、之をたゞ辛いと悲觀せずに其の病氣其のものゝ中に幸福の種があるのぢやから、其の幸福の甘味が出て來るまで一つ病を嚙みしめて見ると云ふことが必要なんぢや。そこに宗教が現實生活の上に尊い役目を持つて來るのであります。

此の世の中に藥ときまつたものもなければ毒ときまつたものもない。毒にしようと藥にしようと自分の受取方一つぢや—と云ふ弘法大師樣の教から、此の度の支那事變を考

へますと、一應は支那事變は國家の不幸せに違ひない。併しながら此の不幸せの中に國運發展の洵に大切な種があるのぢやから、お互國民は此の不幸せを一つ國家の幸せになるやうにして行くと云ふことを考へると云ふことは取も直さず大師の教を支那事變の上に活用すると云ふことで非常に大切なことであると私は思ふのであります。

日本の歴史を調べて見ましても我が日本と云ふ國は、戰の度毎に國運が發展してをります。私共老人ぢやから日清戰爭當時のことを能く知つて居る。日露戰爭當時のことも能く知つてをります。日清戰爭の當時などは私共高野山の大學に居つた時でありましたが、あの支那の李鴻章が媾和使節として來朝し、日本からは伊藤さんと陸奥さんが全權大使として出席し下の關の春帆樓に於て媾和談判の結果、遼東半島の土地を貰ふといふことになつた時三國が干涉して之を支那へ返せと迫まられた。返すか返さぬか、返すべき理窟は毛頭ないけれども返さぬと突つ張つたら三ヶ國相手に戰爭せんならん。其當時の日本の軍備は師團の數が僅かに六つしかない。近衞師團、屯田兵を入れて八箇師團、

海軍は支那の丁汝昌と云ふ男が定遠、鎮遠と云ふ立派な軍艦に乘つて神戸に來た時に、吾々の親兄弟はそれを見て日本にもあゝ云ふ軍艦があればと羨んだ位、貧弱な海軍である。其上一ヶ年支那を相手に戰爭して居るから迚も三ヶ國相手に戰爭する力はない。戻すべき理由はないけれども力がない爲に泣く〳〵あれは戻したのである。其の當時の日本の力を知つてをりまする私共は、世界各國を向ふへ廻して國際聯盟で一歩も後へ退かなかつたと云ふ此の日本の力の强くなつたことを考へます時に、何とも云へない喜を禁ずることが出來ないのであります(拍手)。日清戰爭に依つて國運が發展し、更に日露戰爭に依つて國運が發展した。所が日清戰爭に三國干涉がありました當時は日本は困つたことぢやーと思つたが、後から考へて見ると、其のお蔭で日本は日露戰爭に勝てたのだと私は思ふ。あの遼東半島を戻しました時に、恐れ多くも明治天皇が、かういふ譯で今度遼東半島の土地を戻すことになつたぞーといふことを吾々國民にお知らせ下された。其の時には私共學生の數ならぬ者であつたが、實に無念の涙に咽んだのである。定めて

明治天皇の御心の中は如何ばかり御無念に思召したことであらうとお察し申上げ、胸も張り裂けるやうに思つた。其の後、明治天皇の御製に、

とる棹のこゝろ長くもこぎよせむ
蘆間の小舟さはりありとも。

同じ陛下の御製に

思ふこと貫かむ世をまつほどの
月日は長きものにぞありける

明治天皇が「さわりありとも」と仰せられたお言葉の中に「思ふこと」と仰せられたお言葉の中には嚙み碎いて仰せられることの出來ぬ千萬無量の御思召が籠つて居ると拜察し奉るのであります。そこで日本國民は此の三國干涉に依つて、赤子の腕を捻ぢるやうに遼東半島を取戻させられたことが無念骨髓に徹したものぢやから、日清戰爭後、吾々の親兄弟は薪に臥し膽を嘗めた。其の十年の間の日本國民の精神といふものは實に張り

切つて居つた。そこへ日露戰爭が起つた、それぢやから日露戰爭に勝つことが出來たと私は思ふ。又或は遼東半島還付といふことがなかつたら日露戰爭は起らなかつたかもしれぬ。兎に角、日本の歷史を見たら戰爭が出來る度に國運が發展して居るのである。今度のことは遺憾千萬である。けれども此の不幸せを吾々が國家の幸せにして行くことが吾々國民として最も重大な責任であると思ふ。お互が此責任を盡すに就ては大師の敎へられた順逆不二、禍福一如の眞理を根本精神とし、斯る國家の非常時に生れ會うたお蔭で國運發展のために働くことが出來るのは仕合せなことであると喜び勇んで努力せねばならぬ。同じ國家の爲に盡すのでも、仕方なしに已むを得ずやるのと、喜び勇んでやるのとは仕事の上に現れて來る力が非常に違ひます。

七、吾等の覺悟

人間が自分の受持の仕事を眞面目に本眞劍にやらうと云ふことになると、先づ以て自己の任務の—價値を知らなければならぬ。詰らぬ仕事ぢやと思うたら一向力が入らない百姓は嫌ひだけれども妻子を養はなければならぬからやります。それでは詰らぬ。自分の仕事の中に生命を打込んでやる。此の仕事と自分を全然一つに考へてやると云ふ。誠心の籠つた仕事といふものは仕事其のものゝ價値が分らなければ出來るものでない。さうすると吾々が此の支那事變に努力するといふことが國運發展の大切な仕事であり、それが軈て日本の國の理想實現と云ふ大きな仕事に對する一つの務であるといふことになりますと、吾々のやつて居る仕事は非常に尊い價値のあると云ふことがわかる。それと同時に吾々が仕事其のものゝ中に一つの樂しみを認めて行かなければならぬ。普通の人は當り前の仕事は夜明しして出來るものでありませぬ。八時間寢て八時間働きます。それが碁を打つて夜明しは誰でもやる。又た平生十時が來ても目のさめぬ朝寢坊が、好きな芝居見せてやると云ふと早くから目がさめる。これは碁を打つことに樂みがあり芝居見ることに面白味があるからである。自己の仕事の中に樂を持つて働いたならば能率は必ず擧るものだ

といふことはこれで分ると思ふ。此の如く自分の受持つて居る仕事の價値を知り、又、其の仕事の中に樂みを持つたならば、喜び勇んで活動することが出來る。

私の國の出身であつて御當地に關係のある、清水寺成就院の御住職であつた月照上人と云ふ方、此の方は讃岐の國の仲多度郡吉原の人でありますが、西郷隆盛が月照とならば心中してもよいと云ふ氣になつたのだから大分偉い人であつたに違ひない。私先年鹿兒島に行きました時に月照上人の墓參りを致しました。禪宗の南宗寺と云ふ寺にあります西郷が「月照は國の寶なり」と申して居つたさうでありますが、其の位偉い人だが、小柄な優形の人で尼さんではないかと思はれるやうな人であつたと云ふことです。所がそれが非常な大人物で熱烈な勤王家で明治天皇から正四位の御贈位を賜はつて居るのであります。此の月照上人がかういふことを申してをります「人間は國家の爲に誠心を盡さうと思ふ時には苦しい目に遭ふことが嬉しい」普通の人の考とは大分違つてをります。それは何故かと云ふと、人間の誠心といふものは底にかくれて居る。其の誠心は平生無事な時には働かぬ。何か難しい問題に打つ突かつた時に、本眞劍になつて考へる。さうすると底にかくれて居る誠心が働を起して來る。それぢやから人間が誠心を盡さうと思へば、難しい問題に打つ突かる方が嬉しい。誠心といふものは、難しい問題に打つ突かれば打つ突かる程益々力强く働くものであります。

誠心をつくさん時と思ふには
　　憂にあふこそうれしかりけれ

と月照上人は申してをります。

お互日本國民が此の月照上人の心を以て心として居りさへすれば、如何なる大問題が起つても心配はないと思ひます。

此の心持で行きますに就て、最後に弘法大師が御活動なされた其の根本の精神の立方を一言申上げて御免を蒙りたいと思ひます。弘法大師一代六十二年のお働のあとを窺つて見ますと、どの仕事をなさるのでも、必ず二つの力を合はしたもので働くといふこと

が大師の御方針である、學問をなさるのでも、萬農の池をお築きになるのでも、學校をお建てになるのでも其の外すべてのことが悉く二つの力を一つに集めたもので働いて行く、といふことが大師のなされ方である。卽ち一つは佛の力、一つは自分の力、此の自分の力と佛の力とを合はした力、今日の言葉で言へば神人合一の力を以てすべての仕事をして行くといふことが、弘法大師の御精神であつた。それぢやから大師は何をなさるのでも祈りつゝ働いてござる。働きつゝ祈つてござる。此の祈りつゝ働き、働きつゝ祈るといふことが大師御一代の御活動の精神の立方であつた。

御互に千百六十五年の昔、大師がお生れ遊ばした明日の降誕會をお祝申すに就ては、此の國家の事變に出會はして居る爲に自分の誠心を思ひきり働かすることが出來るのであるといふことを喜んで、大師の敎の上から此の支那事變の持つて居る所の意味の重大なことを能く承知して、一方に神佛を祈りつゝ一方には自分の力のありたけを出して、此の事變に對する國民としての務を盡して行くといふことが大師の御精神にかなうた行方であると存じましたので大體のことを申上げましたやうな次第であります。（拍手）

（以上は昭和十三年六月十四日弘法大師降誕記念講演會に眞言宗布敎界の元老主敎權大僧正眞井覺深師が京都大每會館に於て獅子吼された講演の速記であります。）

昭和十三年八月一日印刷
昭和十三年八月五日發行

發行兼印刷人　京都市下京區猪熊通八條上ル　松本隆寛

發行所　京都市下京區猪熊通八條上ル六大新報社内
弘法大師降誕會本部
（振替京都二九四五番）

終